

編集後記

「社会科学年報」第二号をお届けします。昨年四月の原稿募集から始まり、校了にいたるまで約一年がかりの作業でした。当初の目論見では、もっとスマートなものになる筈でしたが、結果的にはややバランスを欠いたウエイトオーバーの年報になってしまいました。これも不慣れな編集担当子の不手際のせいで、お詫び申しあげます。

編集集中に感じたことを二、三書いておきますと、まず当初の原稿募集段階での枚数規制と執筆者数の調整は、あまり意味がなかったように思います。というのは執筆者数にあまりりきついオブリゲーションが課されていない現行制度下では、希望をとる段階と出稿段階の間に予想される相当の変動は避けられないからです。今回はやむをえない事情により、当初執筆者希望者の半数にあたる五人のかたが途中で降りられ、編集部はその対応に頭を抱え、うろたえた次第ですが、この過程で当初の執筆者枚数制限は事実上撤廃という事態になりました。その結果、総会で定めた枚数制限を守って出稿されたかたには、大変申し訳ないことをしたと考えています。出稿の強制は望ましいものではないし、また到底できるものでもありませんから、当初の執筆者希望は編集サイドの凡その

目安にとどめるほうがいいというのが感想です。

さらに本号の特集が例年より寂しくなった点について、プロジェクトのありかたを含めて検討の余地があるのかも知れません。そのような次第で十月末には補充のため急遽執筆者を捜す羽目になりました。幸い何人かのかたが応じて下さり、漸くのこと穴をふさぐことが出来ました。本年度年報に限っては正直いって編集委員会は量を確保することに追いまくられ、その他の点ではなんら機能できなかったと言わざるをえません。勿論、本誌の場合、現在は審査なしコメントについては全く制度を欠いております。この点については恐らくこれまで多くの議論がなされ、今日に至ったと推察致します。年報の出来上がる過程を垣間見ただけでも、審査の機能を実体化していくことの難しさはよく判りますが、何か良い知恵はないものでしょうか。

年末、学年末の御多忙のなか、校正に貴重な時間を割いて下さった執筆者の方々に心より御礼申しあげます。

(T・M)